

第 104 回日本精神神経学会総会

シンポジウム

## 若手精神科医の研修と相互交流の意義と課題 ——学びの場、支えの場——

コーディネーター 上原 久美, 佐藤 光源

近年、わが国では卒後研修システムが大きく変化し、精神科医療を取り巻く研修環境もまた変化してきている。社会における精神医療に対する需要の増大を背景に平成 16 年度より新臨床研修制度が開始され、すべての医師に精神科臨床研修が必修化された。さらに、平成 18 年度から精神科を選択した医師を対象に、「患者の人権を尊重し、精神・身体・社会・倫理の各面を総合的に考慮しつつ、精神医学および精神科医療の進歩に応じて、精神科医の態度・技能・知識を高め、すぐれた精神科医の養成と生涯にわたる相互研鑽を図ることにより、精神科医療、精神保健の向上と社会福祉に貢献し、もって国民の信頼にこたえること」を目的とする専門医研修が導入された。現在、全国の病院で、規定された研修項目に独自の内容を盛り込んでより良い精神科医の育成に取り組んでいる。これまでは主に大学が診療、研究、教育の場として研修の核となっていたが、今では約 4 割の新精神科医は大学以外で後期研修に従事しており、新しい制度において精神科医の学術的発展の内容もまた変化してきている。

この大きな変革の時代に先駆け、平成 14 年国際的に学術情報を発信できる若手の育成や若手精神科医の相互の交流を目的に日本若手精神科医の会（以下 JYPO）が発足し、現在は NPO 法人格

を取得し活動の幅を広げてきた。本シンポジウムは、JYPO のネットワークを利用して全国で研鑽を積んでいる若手精神科医が自らの研修について語り、その意義と課題、情報交換やネットワークの重要性について議論する場として企画した。

まず、中川敦夫（慶応大）が JYPO 設立の経緯を紹介した。その中で、全国の若手のための研修会を組織できたことの意義や世界精神医学会横浜大会（2002）を含む国内外での活動実績を要約し、ついで JYPO を設立したことで多くの若手精神科医と出会い、視野を広げ、その後の自身の活躍の基盤となったことが示された。

次に松本良平（日本医大）が、若手精神科医のための学術集会と今年で第 8 回を迎えた研修会（Course for the Academic Development of Psychiatrists, CADP）の概要を紹介した。英語でのポスター、一般口演、シンポジウムでの発表や座長としての司会、質疑応答のしかたを習得する機会を得ただけでなく、高名な先生方との相互の交流や若手精神科医間の情報交換によって視野が広がったという自身の実感から、今後の精神医療を担う我々若手が広い視野をもち学術的に発展することの大切さを呼びかけた。

小川雄右（熊本大）は、新制度の後期研修医として大学で研鑽を積む立場から現況を報告した。

大学の枠を越え、地域を中心とした交流・ネットワークを利用して視野を広げている経験から、新制度においても情報交換や交流が大切であることを示した。

平久菜奈子（慈恵大、湘南病院）は、研修初期に森田療法を勉強し、研鑽を積む中で他大学・各国の若手精神科医の現状に興味を持ち、視野を広げようと若手精神科医間の交流に参加している。今回は「森田療法」を学んだ経験について話すとともに、西園昌久（福岡大名誉教授）と閔秉根（韓国）が毎年企画している「日韓両国の若い研修医のための研修会」を紹介し、日本の精神療法を学ぶ立場から韓国の精神療法を学んだ感想や国際交流の大切さが示された。

おわりに上原（横浜市大）は、新臨床研修制度のもとで研修する若手精神科医にとって、学術的

発展を支える場や情報交換の場が重要な意義を持ち、その中でJYPOがどのような活動を提供しているかを紹介し、国内外の若手団体と交流・連携する数々の機会をぜひ役立てていただきたいと要望した。

フロアからの活発なご意見、質問があり、秋山剛理事（関東NTT病院）からは国際化の重要性や医師のリーダーシップの大切さについての発言があった。

研修制度の変化とともに若手精神科医が主体的に研修の場を選ぶようになってきているが、その一方で研修に関する疑問や不安も少なくない。JYPOやCADPが地域を超えた全国の若手精神科医がともに研修する機会や交流する場となってそれを解消し、精神医学・医療の発展に寄与できれば幸いである。